【17】

氏　　名	峯村至津子（みねむら しづこ）
学位(専攻分野)	博　士　（文　学）
学位記番号	文　博　第 155 号
学位授与の日付	平成 12 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	文学研究科国語学国文学専攻
学位論文題目	一葉文学の研究
論文調査委員	（主査）教授 日野龍夫　教授 木田章義　助教授 大谷雅夫

論文内容の要旨

本論文は，樋口一葉の小説について，それがどのようにして生み出されていったのかということを，発表当時の世相や先行文芸との関わりを中心に考察したものである。

第一章では，公表された小説としては一葉最後の作品となった「われから」について論じている。この作品は，後期の小説の中では，「たけくらべ」「にごりえ」「十三夜」などに比べて評価が低く，研究対象として取りあげられることも少なかった。

従来の否定的評価の中に，お町と，その母親の美尾の物語が，一つの作品中に共存する必然性が認められないとする見解があったが，本論文では，まず，この二つの物語の間に或る共通項が見られることを指摘した。二つの物語に於ける女主人公の行動が，共に，当時の社会で実際に頻発し，しかも文明国にあるまじき不祥事として，同時代の論説で糾弾されていたことがらを題材にしているということ，同じく，二人の女主人公が，共に，当時の女性のための教訓書などで批判的に述べられている女性像に重なるように造型されていること，の二点である。

そして，それにもかかわらず，美尾・お町の二人は，作品の中で否定的に描かれてはいないということを，与四郎・恭助という男性の登場人物の造型との関連に於いて論じた。更に，周辺の同時代小説が，右に述べたような当時の論説にそうかたちで登場人物の女性たちを描いている例を紹介し，そうした中にあって周囲の状況に迎合しない「われから」の特異な性格を指摘した。美尾・お町には，その生活や夫について，同時代小説の他の女主人公と比べた場合に，恵まれた条件が付与されているとも言える。美尾・お町の家庭環境よりも甚だしい苦難の中にあっても，貞節・献身・忍耐を重んじている周辺の小説の女主人公に対し，そうした女性たちよりも恵まれたものを既に有していたとしても，その中で満足することができずにあがき，家を出て他の男のもとにはしったり，住み込みの書生に接近したりする美尾・お町は，世の求める理想的女性像を体現するようなヒロインを多く生み出してきた同時代小説の型から逸脱した女主人公である。

一方で，「われから」には同時代小説のパターンにそう趣向や叙述も多く見られるということを，本論文では指摘したが，「われから」には，そのように同時代小説と深く関わって成立していながら，その従来のありかたをうちやぶっていくような面を，多く有していたのである。

第二章では，「うつせみ」という作品に於いて，女主人公の狂気が描かれるときに，日本の古典文芸をふまえた趣向や表現が多く用いられているということを指摘した。そして，それが主人公雪子の狂気を描く際に集中して用いられ，しかも，「うつせみ」という作品の内容と違和感なく調和するように配されているということから，作者の意図的な設定である可能性が高いということを考証した。また，何故狂気を描く際に古典を下敷きにした趣向が多用されるのかという点についても，同時代小説を参考にしつつ推定を試みた。一葉と関わりの深い『文学界』第十二号（明治二六年一二月三〇日）所載の，星野天知（破蓮）作「白露の夢」は，『源氏物語』を取り入れることで，幻想的な作品世界を形成している。こうした先行作品の例も視野に入れると，現世を離れ，この世ならぬ「何処か」を求めるという「うつせみ」の狂気の性格が，現世の現実とは別の時空を喚起するような趣向を要請することになり，そこで，古くから文学・芸能のなかに描かれてきたものが取り込ま

れることになったのではないか，という一つの可能性を示した。

第三章では前章にひきつづき，研究史に於ける評価がきわめて低かった「うつせみ」を取りあげ，同時代小説の中に位置づけて見直すことによって，従来の枠組みにおさまらない新しい試みが，この作品に於いてなされているありさまを検証している。

三角関係が破局を迎えた後から始まり，全編通して，発狂した女主人公の狂気の言動と，周囲の困惑のみを語っていくという「うつせみ」の構成は，周辺の同時代小説に通常見られるありかた（狂気というものが，作品の中盤，あるいは終局の，ある一部分に於いてしか描かれない。また，破局に至るまでのてんまつが詳細に語られてゆく）と比較した場合，きわめて型破りなものであると言うことができる。そして従来三角関係のいきさつがわかりにくいとして，否定的に捉えられてきたこの構成が，〔現世からの離脱〕という明確な意味づけが与えられているこの作品特有の狂気の性格を支えるものとして機能しうるということ，更に，それが作者の意図的な設定である可能性などを論じた。

当時三角関係の悲劇を描いた同時代小説の多くは，最初に行く末を契った相手への思いを貫こうとしつつも，親の意向や許嫁という存在の前に敗北・屈服するしかないヒロインを描き，女性にも貞操・従順を要求する時代のありかたに迎合しようとしていた。それに対し，「うつせみ」には，そうした既成道徳の中に自分をおしこめることができずに悲劇を自ら招き寄せたヒロインが，現実を逸脱する狂気の力によって，逆に，両親や許嫁を翻弄してみせるといった従来の構図の逆転が見られるのであり，そこにこの作品の独自性があるということを論じた。

第四章では，まず，発表当時の時代環境を視野に入れたとき，一葉小説の今まで注目されることのなかった細部が，どのような意味を帯びて立ち上がってくるかということ，具体的には「にごりえ」に登場する〔浴衣〕〔名刺〕〔写真〕という三つの小道具を例にとり，それらをめぐる叙述の背後にいかなる時代背景が存在したのか，ということを検証した。「にごりえ」七章で源七が回想する一年前のお力と彼は，〔揃ひの浴衣〕をこしらえて二人で参詣に出かけていた。【揃ひの浴衣】は江戸時代の長唄や同時代の都々逸や俗謡などの中で，恋仲の男女の思いの証としてうたわれるものであった。一方「にごりえ」二章でお力と結城のやりとりの中に出てくる〔名刺〕と〔写真〕は，花柳界というような場で女たちと客とのあいだで手管や世辞として取り交わされるものとして，当時の小説や都々逸などの中に描き込まれていた。当時流通していたこれらのもののイメージは，そのまま登場人物たちの関係性の表現でもあった可能性が高いのである。

また一葉の小説に於いては，叙述の背後に，一葉の自作歌，古典の和歌，長唄や浄瑠璃などが時に重層的にふまえられているということを，「五月雨」「たけくらべ」「われから」などを例にあげて論じた。一葉は，先行文芸の中で成立していた一定のイメージを意識的に小説の中に生かし，後の展開の伏線としている可能性が高いということも指摘した。

第五章では，「にごりえ」五章に於いて，お力が唄う歌謡とそれを受けての彼女の独白との双方に見られる「丸木橋」という語について検証し，それを通して一葉小説の性格の一端を明らかにしようとしている。

お力の独白の中の「仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずばなるまい」という言葉は従来の研究史に於いても注目され，様々な解釈が提出されてきた。しかしその殆どは作品内部の分析のみに依拠するものであり，また，一葉日記の記述と恣意的に結びつけられることも多かった。それらに対し本論では，「丸木橋」という語の背景を考証した。

『平家物語』や八代集などの古典の和歌に於いて，「丸木橋」は〔恋〕〔男女の仲〕の隠喩として詠まれ，更に〔落ちる〕〔踏み返す〕などの言葉と併用されて不安定な危うい意味合いがそこに含まれることが多かった。一葉自作歌と，彼女が所属していた歌塾萩の舎の門人たちの和歌に於ける「丸木橋」の用例を見ると，そこでは古歌の中の「丸木橋」がそのまま踏襲されていた。一葉には，自作和歌や古歌の発想をそのまま小説の中に流用するということがしばしば見られ，「にごりえ」の他の箇所にもそういった事例が見られる。

また，和歌に於ける「丸木橋」は長唄・常磐津など歌謡の中にも取り込まれ流布していた。「にごりえ」でお力が唄う端唄もその例にもれず，「丸木橋」は自分と思う相手とをつなぐ橋であり，危うさをはらんだ恋がうたわれている。これと同一の端唄は同時代の渡辺乙羽「当世錦の裏」の中でも使われているが，そこでの用法から，この端唄が当時人口に膾炙しており，その内容を読者が熟知していることを前提としている様子が窺える。この端唄以外にも同時代小説には「丸木橋」の用例が多く見られ，〔危うい恋〕の象徴として常套句的に用いられていたことがわかった。

本論では従来殆ど論じられることのなかった萩の舎や同時代小説に於ける「丸木橋」について確認することができた。「にごりえ」の「丸木橋」の背後には，古歌・歌謡・同時代小節の中の「丸木橋」が存在しており，そのように連綿とうけつが

れてきた意味から自由になることは極めて困難な状況の中に「にごりえ」の「丸木橋」があることをおさえておく必要があろう。

本論文では，一葉の小説が当時の世相に敏感に反応し，同時代の論説から逸脱するような登場人物を描くことによって，世論に迎合しようとしていた従来の同時代小説の型を越えるものを生み出していった様相を明らかにした。更に，古典及び同時代の先行文芸からの引用の織物としての性格も浮かび上がらせた。

近代文学の揺藍期に作家がどのようにして小説を書き始めたのかという問題の一端を明らかにすることができたと考える。

論文審査の結果の要旨

本論文は，樋口一葉の晩年の3つの小説について，そのテーマや人物像などが着想され，具体化されてゆく過程を，作品発表当時の世相や先行文学との関わりを通して考察したものである。一葉の作品の研究は，従来は作品そのものの分析が主流を占め，作品外への視線はせいせいで一葉の日記にとどまり，作品の世界と日記の記述とを恣意的に結びつける風潮も見受けられた。

そうした中にあって本論文は，これまでもっぱら「一葉」という固定的な枠内で論じられてきた一葉作品を，同時代の状況や先行文学との関わりという広い場へ引き出してとらえ直し，これまで見えていなかった側面を浮かび上がらせたという意義が認められる。

論者の方法は，公表された小説としては一葉最後の作品である「われから」の考察において，特にすぐれた成果を挙げている。この作品には，貧困を厭って下級官吏の夫と娘を置き去りにして，高級軍人の妾になった美尾と，美尾に去られて発憤し，高利貸しに転じて財産を築いた父に育てられ，婿養子で高級官員の夫を持ちながら，書生と姦通の噂を立てられるお町と，母娘二代に渡る不道徳な女性が描かれる。従来は母の物語と娘の物語の分裂などが指摘され，評価の高くない作品であった。

論者はまず二つの物語に或る共通項が見出されることを指摘する。すなわち一葉が読んでいた『女学雑誌』を初めとして，明治20年代の各種評論，数多い女性教訓書などを幅広く調査して，貧しい家の妻の出奔，豊かな生活を獲得する手段としての妾奉公，上流階級の夫人たちの姦通などのことが当時の社会でしばしば見られ，文明国にあるまじき不祥事として厳しく糾弾されている次第を明らかにし，作品に描かれる美尾・お町親子の性情・言動がすべて当時批判されていた女性像に重なるように意図されており，それでいて作者に同情的に扱われているということを指摘する。また女性を主人公とする，今日では埋もれてしまっている同時代の多くの小説に目を及ぼし，美尾・お町よりもさらに過酷な境遇にありながら貞節・忍耐を貫く女性が理想像として描き出されている状況を具体的に明らかにする。

論者によれば，「われから」と同時代の論説は，「国家の基盤としての家」を支える役割に徹することを女性に求め，小説も，そうした論説が掲げる理想を体現する類型的な女主人公を描き続けていた。「われから」は同時代の理想像に背馳する女性をあえて主人公に据え，彼女たちの，自分自身十分把握できないでいる不安や焦燥を描くことで，時代の言説が抑圧していた女性の生き方をすくい上げようとした作品である。この結論自体は，一葉論として格別目新しいものではないが，同時代の女性論資料の丹念な検討を踏まえた考察には，重厚な説得力がある。

「われから」の前年に発表された「うつせみ」では，恋人と親の定めた許嫁との板挟みになって苦悩した末に発狂する女主人公が描かれる。論者によれば，この種の三角関係の破局を取り上げる小説は同時代にかなり例があり，中には主人公が発狂するという設定のものも幾つかある。しかしそれらの作品がすべて，三角関係が破局を迎えたところで終結するのに対して，「うつせみ」は破局以後の，主人公の狂気の言動と周囲の人々の困惑を描くことを主としており，破局に至るまでの悲劇の恋の過程はほとんど述べられない。論者は，悲劇の恋よりも結果としての狂気に関心を寄せるこの特異な構成に，親の意向や許嫁という制度の前に敗北せざるを得なかった主人公に，狂気という形での現世からの解放を与えようとする作者の意図が込められているとする。そのことの論証の一環として，論者は，この作品における和歌・謡曲・近世歌謡などの古典の引用，古典を踏まえた趣向が，主人公の狂気の描写のくだりに集中していることを指摘して，狂気に別世界のイメージが色濃く付与されていることを述べる。一葉自身の和歌だけでなく，一葉が学んだ萩の舎の塾生たちの和歌会の作品にまで目を及ばして，一葉を包んでいた古典的教養の世界を明らかにする論述は，周到と評してよい。

「にごりえ」は前二者と異なって従来から論じられることの多い作品であるが，論者は細かく注釈的に読むことで，新しい意味を発見することに努めている。たとえば作中にさりげなく取り込まれている「芸妓の写真」と「客の名刺」という小道具について，これらが明治期の花柳界において果たしていた役割を，当時の小説・俗謡を綿密に調べて明かにし，その場面における女主人公と客との間柄について考えようとするなど，興味深い論述がある。

本論文の足らざる点としては，まず作品数の多い一葉を論じながら，考察の対象が晩年の3作品に限られているということが，何としても物足りない。「われから」「うつせみ」というあまり注目されてこなかった作品の分析にかなりの説得力があるだけに，「大つごもり」「たけくらべ」等々の一葉の代表作についても同じ方法を適用して，新しい読みの可能性を提示してほしかった。また関連資料の博捜は十分に評価されるところではあるが，なお行き届かない面がある。同時代の小説に関していえば，雑誌掲載のものはよく調査してあるが，半井桃水，村上浪六などの新聞小説には目が及んでいない。古典の影響に関しても，調査が比較的容易な和歌・歌謡だけを取り上げている感があるが，日記や蔵書目録から知られる一葉の読書範囲の広さに対応して，さらに詳細な調査がなされなければならないであろう。

以上審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2000年2月21日，調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。